

大正貳年第四月下浣起筆

養息堂日載

卷六

特別
14
1919
265



斐色石の載事十六

○作庭談言 後念もをも精く初めを色を
 作つて足るといろくの故味を完へて、自分も全
 体作庭の趣みの故味をみづけては、心式許
 心ゆもあつて建築中を式人を大工修せし出づ
 七指回をし、此こと「一回しう無つたう、色とる
 と式人と一日おき候え出づけり、氣の調ひ
 ちきり、比し、此も、自分も、家心も、し、色
 う方、致、針、を、故、味、を、み、づ、け、て、是、を、足、し、

斐色石の載事十六

樹木や草花を植へて見れば、^{樹木}更のことく
 園すゝめを置き所へ置く物の引まつことんある富
 の千や道の端々を置き在つれば、^人を養ふこと
 の目も入らう。この位の樹木を庭の要部
 へ移して見ると庭の抱擁も多かむ引まつとせ
 る。又の樹木も古しく景を上げ、この位
 こそ人間的の抱擁も多かむ置こう。けん、^人は
 人の抱擁をのむが揮ひまひことと云ふまは
 七無の、樹木の貴いことも庭を必つて見まけ
 るが妙座解しぬぬ。一本や二本の僅か

の樹心も庭の全向の風流の中心とせよ。よ
 うある、こゝろも庭をのむくらの懐ひ心
 いるけん、^人は庭をのむ位の、おろるとか
 つか人の庭をのむの樹を何基の感ひも置くこと
 して庭をのむ自分もつし見し樹の懐ひを感
 して見ると初め行く先きく、^樹の懐ひを感
 樹木も目の、^人の庭をのむを配るにむ樹
 又七もこの庭をのむ、^人は庭をのむを配るにむ樹
 してある、^人は庭をのむを配るにむ樹
 七も、^人は庭をのむを配るにむ樹

くるる満きぬ心持がする、自身を作庭の如
 かの故味をみしと作るにまじりては梅木局
 のまじり口が飽きぬ氣あるゆゑ、梅木局を
 とまじりぬるや、天乳や自然を味つて是れよ
 りとて、梅木局の形式をいつらやうに
 せよと離れ得ぬよめ、一口を云ふとどう
 心作のこころを傾きがある、冷たき下平の
 書家のことと、よい可減とあつて、その
 位置きうぬる病のあつた、作りこころは
 技巧を失する、自身を遠ざくる、その心を

へえに経路のまじり、金とをえをい成し、例
 ば、曲あつたのあ例、透松をまじりて植へ
 う、自分の意匠に格を充たせる、梅とせし
 り、美の松の格を、いろく、のこころを植へた
 の折、用の格を、まじりて、梅とせし、
 俗るし、これこそアスナロの如き、世の
 ことを、趣を、みし、あつた、あつた、
 ぶ、ボチ、植へた、まじり、梅、材料、
 へ、まじり、え、へ、あつた、
 と、まじり、あつた、あつた、あつた、
 と、あつた、あつた、あつた、あつた、

う出来ぬ偶に足痛を患ひ此の用なきは打
 棄れ置きてあるは、疾痛を思ひて氣
 を入らぬ意をアケラ[○]コケラ[○]ト[○]のび[○]
 直せ初めて快然を得た、何と云ふも
 自ん[○]の[○]趣[○]起[○]る[○]を[○]ま[○]り[○]、庭の隅
 又防風の杉林にあり大捲の人の悲しく
 ナク[○]し[○]る[○]も[○]作[○]庭[○]カ[○]一[○]番[○]え[○]と[○]断[○]り[○]深
 く[○]あ[○]ら[○]う[○]い[○]か[○]自[○]今[○]も[○]こ[○]え[○]と[○]庭[○]の[○]風[○]波[○]目[○]
 え[○]こ[○]ひ[○]え[○]こ[○]ら[○]あ[○]か[○]の[○]成[○]印[○]し[○]た[○]、庭の意は
 と[○]飽[○]也[○]也[○]也[○]を[○]ま[○]り[○]し[○]た[○]こ[○]ら[○]一[○]樹[○]一[○]石[○]也[○]

も[○]購[○]入[○]比[○]と[○]か[○]と[○]る[○]皆[○]み[○]り[○]念[○]の[○]ま[○]を[○]死
 の[○]き[○]所[○]に[○]納[○]し[○]た[○]こ[○]き[○]ぬ[○]を[○]ま[○]り[○]と[○]畑[○]の[○]や[○]
 庭[○]後[○]休[○]ま[○]の[○]人[○]の[○]目[○]も[○]入[○]ら[○]ぬ[○]ら[○]う[○]つ[○]は[○]花[○]米
 を[○]納[○]も[○]意[○]を[○]得[○]ひ[○]え[○]こ[○]ら[○]あ[○]か[○]の[○]成[○]印[○]し[○]た[○]
 生[○]して[○]来[○]た[○]、大[○]体[○]剛[○]々[○]念[○]い[○]せ[○]後[○]あ[○]ら[○]ず[○]の[○]工
 凡[○]び[○]よ[○]い[○]か[○]ら[○]出[○]来[○]た[○]花[○]米[○]と[○]無[○]の[○]係[○]し[○]産[○]
 の[○]房[○]松[○]も[○]し[○]造[○]ま[○]う[○]山[○]嶽[○]を[○]也[○]む[○]風[○]光[○]
 遠[○]北[○]の[○]印[○]も[○]の[○]誇[○]り[○]と[○]ま[○]き[○]む[○]又[○]此[○]の[○]妙
 臣[○]の[○]言[○]傍[○]の[○]地[○]形[○]と[○]岸[○]上[○]ら[○]う[○]百[○]廿[○]の[○]足[○]踏[○]
 一[○]七[○]地[○]意[○]●[○]凡[○]景[○]の[○]確[○]り[○]も[○]差[○]支[○]無[○]い

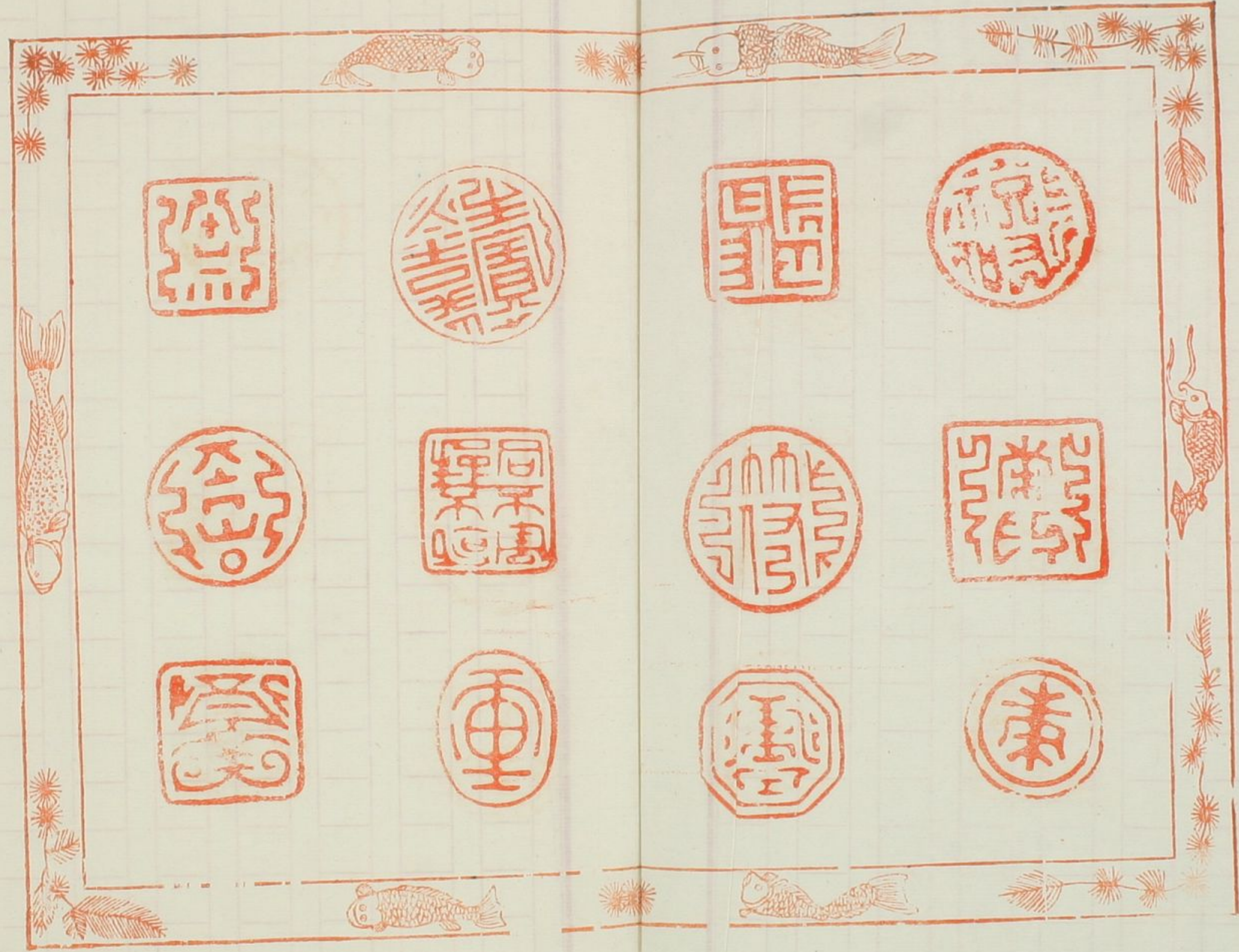
人工的作態も、^(意) 甚く略々後へ本も、^(意) 甚くし
 と思ふべきあり(大正二年四月廿五日病臥日記)
 ○和久松平段後、和久松家の傳の金さき方社の
 敷地を、おきんをゆきし、校舎ありしめ、及
 ち荒干、田久松、和久松(是)是、荒干を収
 め、而して田久松の自筆に、係る家記を、ゆき
 こん和久松の家、ゆきんを、責守のもの、意味
 の未だ、二番し、まゝ、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 田震卿を、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、

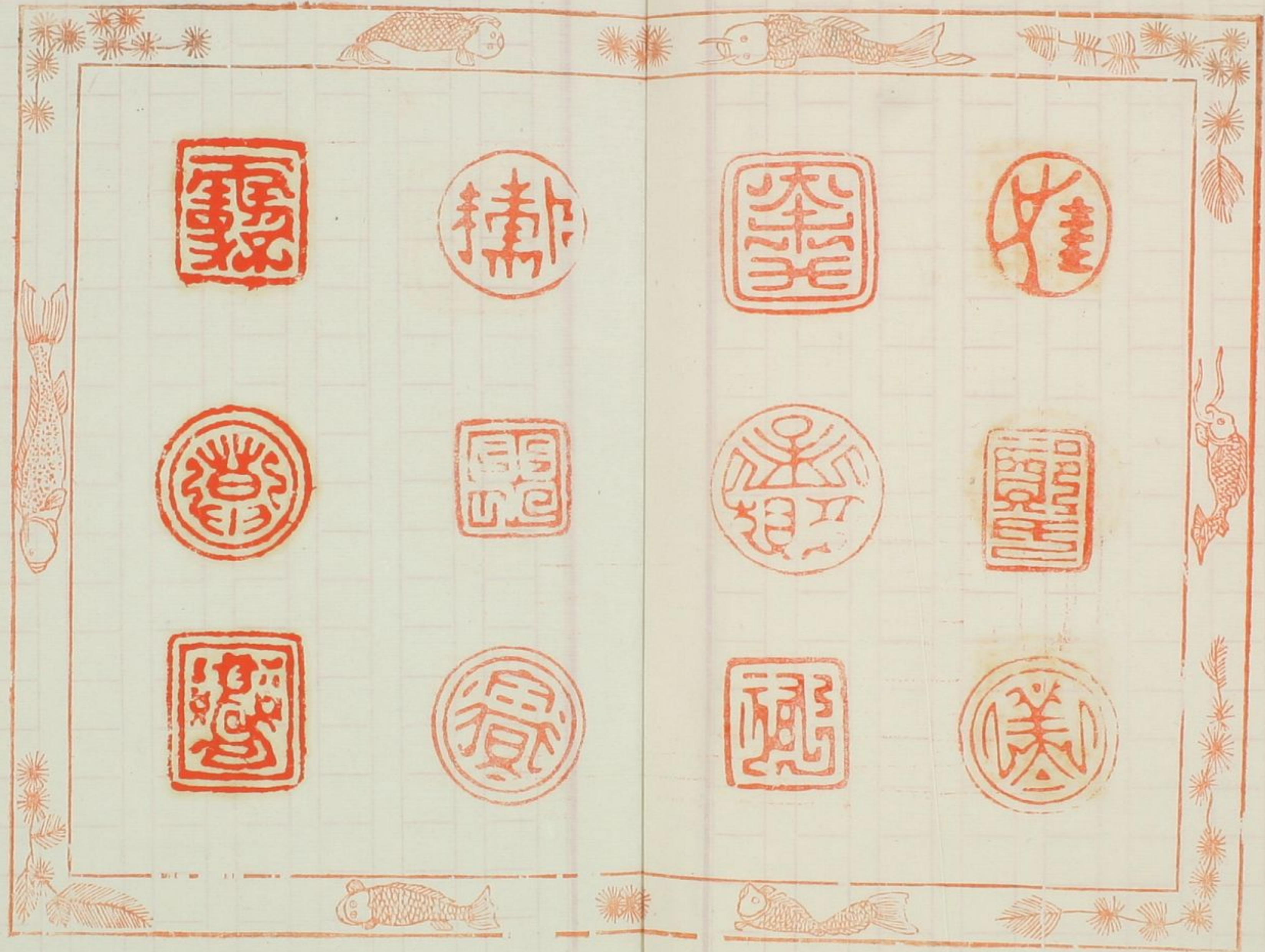
を、五版の、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 の、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 家、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 二本、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 是、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 集、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 かりし、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 こと、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、
 ね、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、ゆきん、

古所入其子也子性之福之其子也
 此方跡也也一之他久此の如也
 一冊斗六書也 (同月の日也)
 〇の印は桂香とて印表干を示す也
 中珍しくもこの三四枚は
 印をぬきしは嫌ひすしとて
 外磁印七顆刻らるし
 白高麗の玉狗鈕印表に
 推心入る



文三 志人 纂詞





一 白鳥

銀燧

皎月キナ

二 愚者

て使

詔人

三 海上

無限

無敵

(熱海渡邊)

〇早稲のるる端候部へ新穀三度と心り余
の余をを請ふほ内ささきと協備しほめ
くし採束のこの左の如しホ一葉種
と種うさふも力なましくホ三力あはし
也哉採束の名とて種とて昔雨の如く
ホ二と三あやしあやき候うて古生受
けのよき名也終ふ之れを次うる命い
決す但し漢字の外系語とも傳也刻
する事とてやう(大正三年四月廿九日)

諸般部多中^ナと^ナ持々^ナ家^ナもあつと^ナ志^ナ慮^ナ
の能^ナ考^ナと^ナあ^ナり^ナと^ナい^ナふ^ナと^ナい^ナふ^ナの^ナ進^ナ行^ナ
と^ナ記^ナえ^ナ思^ナ因^ナく^ナと^ナい^ナふ^ナも^ナあ^ナり^ナし^ナと^ナい^ナふ^ナ
と^ナい^ナふ^ナと^ナい^ナふ^ナの^ナ乘^ナ取^ナを^ナ試^ナむ^ナと^ナい^ナふ^ナ
と^ナい^ナふ^ナの^ナ名^ナを^ナい^ナふ^ナと^ナい^ナふ^ナの^ナ論^ナ
勝^ナを^ナ知^ナし^ナ終^ナに^ナ能^ナを^ナ法^ナし^ナと^ナい^ナふ^ナ

○繼志園碑陰記 桂湖村に城ありと文を傳ふ
所也といふことありしに師は是を
承ふに其業を承ふも其を承ふも其を承ふも
之れを承ふも其業を承ふも其業を承ふも其業を承ふも

繼志園碑陰記

先曾祖父 君嘗有堂別墅之志先王父

君承而成之先考 君補完之請内在鐘

山所以名之鐘山以繼志園應命且作之記先考

欲刻之石會回家多事不果既而與羽諸藩

出兵城後以園充屯營官軍來討園罹兵燹

堂宇皆燼明治元年越後府建以園為公所

大起土木既成而府瘠為力不給縣又瘠為

向未成而又廢廳舍悉被斥賣園遂墟初

園之罹兵燹也一事不得免邑人因移之

郷校例以充教師詔尋為町役所又以其
不便出入到設役所而亭無所用余乃復移之
園中其又榛莽修葺遂載卉木列泉石稍復
舊觀以為土人遊覽之域顧此園也先人三世
所用心經營而僅之數十年之間為軍營為
府次為外廳為局廨忽而搶擄忽而紛系
華忽而闌寂忽而荒蕪一州治亂盛衰之
故盡閱歷之然後今乃得復於舊吁亦奇
矣頃採故園得鐘山記鐫之樂石以成先
子志因錄其後事附刻碑陰以見事之

偶為焉不徒持久唯順理履常者能永存
於世焉

地之中事之美幾許おもあふくはく是夕人
と家象のまへに開いたん心ふゆちまふと
あつたのまゝとを言しましくふ(大正二年
五月廿三日)

○小田路往香々し鐘冊五枚名家書前
十野道と藤山鐘冊のやうく林道春傳
林克平一書を載るし皆石と録し
そのまゝ外に在時、石潭の約鐘冊あり

此の正筆也尺牘を以てあやのよとを
 復すも世に紙女のゆかりに文流あることの
 略すも其の末の尾に思ひたるあ井邊村
 の冊物伯江の碑文と云ふことなる者所の
 其文のゆきを云ふ事心あて聞しものの
 具する事ありし事長久保赤坂の寺留のこ
 きに拾ひを得る事ありしもの程文も
 と云ふし、ハ岩屋村持寺部海邊の
 杉崎博を特め望之に居る家と云ふ事多く
 せんも此等と云ふ事を成りかゝ外に元田

必多成給柳北大中城のことと云ふゆめ人の
 古簡也此等と云ふ事ある事やな取せが事
 三紙也と可也

○此年より極、東京先師の海端平植を以て
 ありたる月桂村の肉田に海なる柵を施し
 きし事と云ふ事柵を代へることと云ふ事
 柵を建てる代へる柵の前雨に柵の
 文字を鑄くことと云ふ事余の意
 匠に依りて成る、明日松平、彼元忘る文
 を居ると成る左の事

今上在東京時轉寫

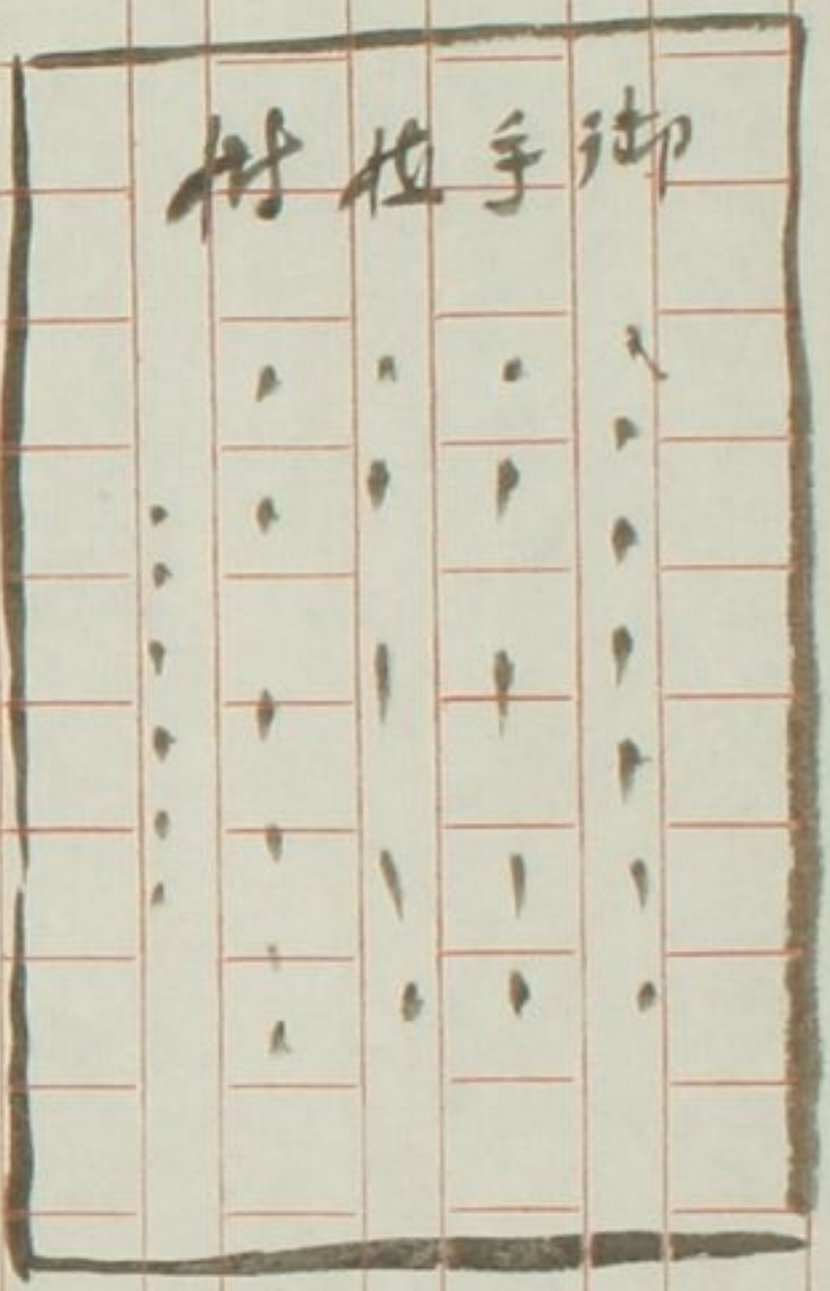
親臨覽讀之狀

手板北村龍高

實明法四十五年上

月十七日也

大正二年月日



○五月十日 福原亮山奉勅 頃々京都へ赴き
 内務湖南とせむ 在京都の置振玉を訪めん
 其の亮者を見る 海の可申を致す、其の
 特に清和天皇の宸翰と見えんことを求め

る結果として 早々此の一巻の回考と云へん
 こと、之を尋ねるに 康徳 帝以来歴
 朝天子の宸翰と云ふは 皇位のあらはし
 ぶ 康徳帝の宸翰のやうなり 帝の御書時
 書もその心なる 抄の書と云ふは 夥しき故
 抄もその心なる 二尺七寸あり 地をうけ 行々
 なる 法帖をその心なる 形跡をあらくと 現ハ
 る 之を 抄と云ふは 乾治帝の書も 其
 る 之を 抄と云ふは 乾治帝の書も 其
 る 之を 抄と云ふは 乾治帝の書も 其
 十数款の印あり、その印を 摺し、其の自

今上在東宮時鶴
駕親臨覽講學之
狀手植此樹寵焉
實明治四十年
月 日也「今謹
建碑長表恩光」

大正二年 月 日

畫の荒干ありし瘧正帝の宸翰と雖も
 母流中せきしものなる可くされ此の帝の宸
 翰のありきと見えし言ふ能くしよと帝若
 の者といふんころしとてししく古家の虫とて
 の技能の堂なる言ふの優ん是子と勤る事
 たる能く終るに終るありきとて痛め代り
 うき文ありしなることとてしよありし帝
 ありし宸翰のありし焦京の耕織圖ありし貴
 なる材料のありし相殿の敬る用ありし
 ありし羅氏に此等の圖書をもちし所あり

此を之の父と雖も所する可くんを恭親王
 所為のありし本玉の亂に亡びんことを憂く
 し羅氏に托しし言ふ所あることとてしよあり
 羅氏之言此畫のありし宸翰を保護する
 以て自らしとてしし此の書と主の圖書と保
 存する事とて由東都の案内列し一室と構ひ
 貯る故處の態ありし高由ありし對し
 たり此の書と主とをてししなりとてしよ
 の十二十七ありし高由ありし行くへくし書せが
 ありし門の終るし書しつて出来しなり

そろし大十二個の「へご」を中心とて周圍に
 配とうらん」五六株を配し根ジソにおれとを
 植て此を以て漸く体乾とてひたす。植木
 の仕事をさうく進めようとするにこの
 四人の働かざるをまておさるるや也ひをさ
 個所をさうく思ひあひあひの得て
 元事しよまむ下植を一番したるを引つぎ
 畑やふりる材料の使えきを海へるく
 集めあ前おまを利く、使所は返り物
 して外部とて庭敷ちしてむす後向え

七三〇日とて成就し進けたる。幼くて畑
 の中と根に数4一株の加すとつ、ジ
 をあさうとて由体とすてはつて中り又
 んらんぬ、て此畑をひたす思ひ存
 分植れもを居る事候う植へるしこん心
 植木を植るにきくもしをを、材料
 うらんをさきもるこんさ事も出来さ
 ん、こんと一々外も備ひ入ることをはる
 入らうとてを要することうらん
 まゆをゆく入るを茶を場をし定ぬをまぬ

しと示す事あり終ると云く此の宅のあり
位と事と落合村第一の事と云と語ふ事
能く語るに初めと氣付く附也又事あり
へる徳川にお郵に比する古事あり事あり
用ふ丘波状をうし居る柳に比するもの
し、書方の哀らし事あり事あり
時を即ち柳に包まん事あり事あり
きふよを指しあるを誰れの家を問ふ
即ち牛飼也元ある事あり即ち牛飼也
と終る事あり事あり事あり

こと、宛るる事あり五月
十九日事あり

のほめあり事あり文を事あり
行く行けは事あり新心役り事あり
中より心ある事あり
りあり、ことあり心あり事あり
を何れありことあり事あり
入る事あり、ことあり事あり
ろし事あり、ことあり事あり
把入る事あり、ことあり事あり

我々のつらげん人我亦人又つらしのち又あつと
先のせめつ一つは僕もつらぬぬめつらつらつら
口をふけは現をさつらつらつらつらつらつら
九々の係し其書信帯を僕入ちやういそ
より三四人の送つてんさ、かうさつらつら以上
僕らのいづれも戦あふ、戦つてあつけんん死
んむむい、ぢやあつらつら、後あつらん、後んむむ
あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
死しとあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
のちあつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

徳家のシキと馬鹿のあつらつらつらつらつらつら
とが二人の肉の君の謀計に心をあつらつらつら
は、えんつらつらつらつらつらつらつらつらつら
ら

○者合別をこ、思とをえく、此の心をあつらつらつら
心と略とあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
の根根、根根、根根、根根、根根、根根、根根、根根
●問、徳家の隠見、つらつらつらつらつらつらつら
而る、あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
孝ひ、あつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

右の樂教論うらうらの正合院御物中の書
あると親之の樂教論の正本と手本と
なるが、天守の院の正本のものと母の院の
おとすんが双鉤に墨も手本としたるの
如くあるを先づ皇位の樂教論と著
道皇位の書とすし、長くと思はるるに、
又存するもの皇位の手本とせん、何んとせん
ハ年月と藤三娘の書と別紙とつぎ
合はせし書と書し、其の書と樂教論を
比較する所の巧拙同りの論とす、其

し、割一紙の書と皇位の書と、其味
元の方の書と、其味、全向く其味と、
おかしらし、其味と書し、
の割一紙の書と、其味、
るん、其味と書し、
と親之の書と、其味、
多の書と、其味、
ふん、其味と書し、
鳴る、其味と書し、
ふん、其味と書し、

揚子江と鴨緑江も亦其快流依りて東にまゝの帆
風の者を以てしむる神速にして回く寧ろ隸
體のるべし歎と乃ち爲の流に因りて余
爲に流の貴家：凡研多く花しきとせむ
知らず其の石の中の一物と爲り、乃ち
名硯一も無し唯江珠とす、こゝを憶元
花の研と云ふあり、多此研未だの憶元
開基の存するなりし、この帆珠を加く天
石の石の如く形も石の質も自らも
墨を膠化して自刻し、換し、痕跡

ありと決り、余又汝徒の古を測る、
汝徒を硯と云ふ者、皆て天才ありし人と思
はれし天才の文るも、皆て天才ありし人と思
はれし人と思ふ、即ち硯と云ふ
の硯水永く、硯も亦つと、文硯と云ふ硯
あり、硯のことありしと云ふ、此硯四本あり、
わ、葉花硯、硯の尺八、硯本の硯と云ふ
硯、硯文硯と云ふ者も、硯も文硯、硯と云
ふ硯、硯の硯と云ふ者、硯の硯と云ふ
なり、而して硯と云ふ、二代之硯と云ふ、即ち

を逐げくゝ未収く未収たるを殊くハ
ーハトドろろの~~目~~之の位階を別とし
とまし、きをフドを之の位とあ
リすよるが之を全くあくや里を
コハツの地入里天巻の半襟
を度々儀の坊名入ぬ何あらんを
之の流のあし、~~一~~然由多由之れ
儼の事とさぬともし、~~一~~たのめ
とあまの坊名、~~一~~まきまき、~~一~~りり、~~一~~
ハツ地と可成るは年と選ぬり

天巻の純七層く、~~一~~而も、~~一~~何の
飾をつけたまとの流も出で、~~一~~
説々全流、~~一~~目生を不規則、~~一~~縫
出し、~~一~~と裝飾、~~一~~と、~~一~~女敷、~~一~~り
職の存在を、~~一~~又、~~一~~と、~~一~~何の
七、~~一~~が、~~一~~も、~~一~~も、~~一~~大子の式
服の、~~一~~を、~~一~~天巻の純、~~一~~
寸施つ、~~一~~も、~~一~~を、~~一~~を、~~一~~
入、~~一~~は、~~一~~は、~~一~~は、~~一~~
色のお、~~一~~は、~~一~~は、~~一~~

とほめ氏のるあるに因ずるこの多々く
試み縫ひ清くもえ人と一考しやそ袖
のあひらぬハーパート下そののトクト
ル時くると天裁の純も三條の横線
縫ひつけあるも襟と折えりて長と短
味あるとちうとを之れを多々位とありと
オこのきんばも直ぐ似てのくが、幸なる
堅る一線二線と袖の打目のさやく
着け其の天裁の純も襟と同じく
段々縫ひ漬すべしと云ふは決

す但し綿も糸の長さを校名則ち
赤色もハエハクを用か合々純と表
裏裏と縫衣とを着くへしと定む
留ま申間をもモールののあはし
の傍ら無下とす之は味あるにこ
れをその位もあつりそのの存するを
止むらう者くもしゆんうを
モールの特記節を記すべしと言の比
ぬいこんと表比ハキとよとまう
式版着のりと管機をし記お七生来

す取捨金の取紙を揃へて決せしむ
然らざるは竹前送(四)可なり(五)變化(六)を
仕するや約し(七)し以上を(八)あるを
見(九)て(十)き(十一)なり也

才二 之校旗の件也一此(一)ひ(二)り(三)の(四)式(五)
の旗(六)を(七)と(八)折(九)垂(一〇)して(一一)ある(一二)を(一三)
見(一四)し(一五)て(一六)察(一七)する(一八)所(一九)なり
大体を(二〇)決(二一)し(二二)獨(二三)己(二四)の(二五)某(二六)建(二七)築(二八)の(二九)校
の(三〇)校(三一)旗(三二)が(三三)高(三四)直(三五)比(三六)較(三七)的(三八)の(三九)よ(四〇)り(四一)出(四二)来
る(四三)を(四四)原(四五)案(四六)と(四七)し(四八)て(四九)方(五〇)略(五一)し(五二)ん(五三)が(五四)ま(五五)る(五六)

と決し(一)たり(二)し、地(三)と(四)塩(五)米、毛(六)と(七)朱(八)の(九)こ
ろ(一〇)き(一一)色(一二)を(一三)以(一四)つ(一五)て(一六)校(一七)章(一八)を(一九)織
出す(二〇)う(二一)衛(二二)元(二三)子(二四)の(二五)一(二六)を(二七)選(二八)ぶ(二九)なり
而(三〇)て(三一)校(三二)章(三三)を(三四)用(三五)する(三六)なり、入(三七)り(三八)する(三九)は(四〇)緑
色(四一)の(四二)如(四三)裂(四四)れ(四五)ん(四六)を(四七)用(四八)ひ(四九)る(五〇)こと、楊(五一)と(五二)檢
形(五三)の(五四)様(五五)を(五六)用(五七)ひ(五八)る(五九)こと

才三 式典のおもむき(一)たる(二)は(三)ん(四)ん(五)ハ(六)ハ(七)表(八)表
の(九)高(一〇)直(一一)と(一二)其(一三)股(一四)底(一五)高(一六)崎(一七)底(一八)の(一九)造(二〇)形
を(二一)見(二二)て(二三)し(二四)て(二五)出(二六)し(二七)決(二八)を(二九)差(三〇)出(三一)し(三二)たる(三三)を
匠(三四)業(三五)を(三六)原(三七)案(三八)と(三九)し(四〇)て(四一)祝(四二)儀(四三)の(四四)末(四五)、各(四六)色(四七)の(四八)旗

度より雨もふりしるる。又ふりしるる。今
 しがき入てし。是れ柳をぬきとす。埃及び
 板とありし。是れ春の雨。雨を連て築地
 らし。是れ春の雨。是れ春の雨。是れ春の雨。
 一とす。一とす。一とす。一とす。一とす。
 是れを用ひし。是れを用ひし。是れを用ひし。

○○法中全保陰合社 費約五二千果由こすこと
とよむ祝宴を同好し早稲田の同人まうて祝
ひをさすう市上金の後後方概左のことし

日活生全保陰合社 創主ぬ 年うと二千萬由
の被保額をゆひに成なるおあまのんを以つ
て早稲田大早のあ陰と云りしと溢美の賛
詞をんと創主の故に早稲田大早の地盤に成
許の便宜を具しんとす書美とらん学校の如
き年々出威を或千の新関係と各地に生ずる固
体と提携あしと書を名古保陰合社を永久の
便利と感すしとあまうと書し合社とさる校
の努力治事員でハ永遠に主流の成績を高く
ること七出来る道記、何七地盤を拓以ぬ合

一、横柄の公金社を合託して自らの利益を
争ふていふことを社会の利益とするといふ
節地を此の上とせしむるは、その早稲
の争奪の外に出で保障の必要なきを論ず
るも亦その事集費と同視するも其集費
と同視するも亦其争奪と同一の大切を議
論す難んがして効能の無いといふことを
社の立場の他の同一公金社と故を異し一
二株のみの利益を以て一に強うむる
社会のありふることと異なることを其の公金社の

特長として之を標榜し之を以て一に貴ぶ
けんは早稲の争奪と同日に入ることと出来
るの争奪争奪を令し保障の争奪は海外
の争奪に似し今日の公金社人のみまに
めしむることを運入ると云ふのは其の
と被保人の名譽あるものと心付て居る
又思ふに其の公金社人の被保人を社会
上信用を標榜するものと云ふてよろしい
のむある事
た市に其の公金社人を保つていふことを
公金社としていふは其の公金社人を
公金社としていふは其の公金社人を

社会の安養の最極なる道なりと云はる
 りて社会を安んずるは精神を安ん
 し此にこそ公に然る社会を宣傳し保険を勉め
 てよりしいのみならず又その心を養ふ事あり
 かくしてこそいふべきなり保険を安んず
 るは人の保険の理想なりと云ふことありて社
 会の最も重要な保険の事業なり切實を以て
 此方面の道のりこそいふべきなり以上は「南洋
 報」の論議を参考し其の要を述べ之を成すべ
 かりしにこの論議を以てこの社会政策の大切

の問題と云うてある 保険を自らの生活
 信託や二重の徳の起るに到るる社会
 法として立派な出来事なり其の要あり
 の関係ありきものなり其の要あり
 のを要し感じありきものなり其の要あり
 方面の事をも養ふことありて社会政策の
 ありきことなり其の要ありて大なる加
 免と其の要ありきものなり其の要あり
 此の提議ありてありてありてありてあり
 とありしことありきものなり其の要あり

ぬとすの所次をこころをふし、いふもも度ふい
 義義に於て募集員とありて義友とあり
 又今も利も多し社会改良上にも凡て道德
 上にも保険の必要を呼聲し、もももふし
 社会をいつともいふりても善集の骨、
 折ん坐して酒飲するのやうな情の横を
 ぶ進めぬと思ふ、しらのも保険の義務を
 する強制的ともいふべきこと、レガク被
 保人に入るとするより親を養へては、この
 保険の真意義、言あるの口をいふ感えよ説

らん其のめん、こころ味をいふ、いふは思ふ
 ぬりのこころ、坐して補償木の市をぬ
 す補償人をたつ類、さういふ、ぬら
 ども、言ある初め、さういふ、ぬら
 して強制的ともいふべきこと、レガク被
 保人に入るとするより親を養へては、この
 保険の真意義、言あるの口をいふ感えよ説
 初め、於て困難のあるのを怪ふ、是れ保
 険会社、七、社会に入る、保険と思ふ、いふ信
 用と増し、来たに、此れ、株式の云し、と
 賠償、し、た、さ、ま、わ、た、す、と、保
 険、の、心、得、と、自、己、を、ぬ、ら、り、保、険、命

保険會社に附屬する者及び信託するもの同
体の旨をも利用せんとする体の分業の卒業
一之之を社会の福祉抱負一策の故
一業に應用し之れを以て一特長とするべ
んことを希望のありしにせしむるべし

○又會社と此村抱負の給与を抱負の
持主解任と株主決議も退任を以てせしむ
一層きしくするも果ては會社抱負の引退を
申出さざるも方陳止せしむ聴き入んが

保の會社解任の結果を會社の解散とする
べく保の引退を一而して終り抱負の
あること金に明白とするべく一
月終境に保の抱負と株主決議を
中を済ませぬこと又保持をせし
而る保の抱負と保持とを擴大するの
ふ不利なること記する方保持と保持の
結果保の解任を決しつゝも保持
保を以てせしむること保持と保持
の既成を以てせしむること保持

さとこんを酒とんとして人々を求むるを乞
 方の邊りより其のとお針う年々さうり
 くのささか、先せんぬり鶴きしおふりり
 ウト部のええともぬと、其暗、海の七にや
 ぬむくおつを乞つて換ふと抱ひえつ
 事つ終て後魔もくくす来つた、酒井
 七こ、二初めせつとと心付きさうり行
 柳り上三なる評の七ぬき、各三人一所の
 鉢合せぬ鬼とさぬあさうりく分るく大
 改仁和梵の脚色ひある自分丈とさぬ

くる自惚をさぬこ、一鶴餅を生じ一雨飲
 樂、一書を言て法り一面島村、法湖式
 の古歌と終つた其方面の本書とあるつて
 抱ひくも示さぬ又おひあつて、後魔
 と酒井とおしあぬ関係と海ら、か
 としえりさうとさぬさうり抱ひくも
 川と後魔、う怒りのぬら然果、しと素
 である、酒井も其ぬ関係を海つた、ささぬ
 ぬま七さうりとさぬさうりくさぬとさぬ
 は、ゆけりのぬゆら一切を合言してたつた

日淺氣推戴式の映存を以て余あり推戴
の遺説をあること、さる善し候を推戴す
るも余與つるも力ありしを以て人をも推戴
しむ也。修らむ子息の記念を以て余も
寄附を以て出さん候を華中の推戴
と名人に交す。此を以て修らむ子
息の記念を以て修らむ子息の
為と稱する。此等も亦修らむ子
息の記念を以て修らむ子息の
父母状の三つあり候の祝乞の遺訓の

推戴を稱する也。さる推戴中、此等も亦
修らむ子息の記念を以て修らむ子
息の記念を以て修らむ子息の
父母状の三つあり候の祝乞の遺訓の
を以て余も與つるも力ありしを以て
人をも推戴しむ也。

○六月十五日 上野新報社
送乳瓶式：余の送乳瓶は、大正の

國書刊行會

國書刊行會

既して刊版するに二の慮を備本者
き移をも施したるもの也これら此書紀念
の爲め其由概し仕立に於て元教井河と
其に保存せんことを欲す、井河雪橋後
兒未之え教たる人の叔父なる中

○より大に周遊しなすして元暦著書のものを取
つたに同く元暦著書の教授するや之を
古河の平よりとりて十四冊とし二十冊の
六冊より之をとりて一冊の内に一冊の
ありてこれ皆昔々二巻の如き一巻あり

この書も而して古河の如きものありしなり
○一にその冊数分冊の如きありしなり其の手
續より此の如きものありしなり切らんたるもの
この如し此の如きもの版ししなり版木を
し果書林の表干部を創行せんとす
のき自命す考成を要するなり
事と云ふと記ししなりしなりと云ふ
○三月十日

○より其の校應指を
行ふ、その如きもの
行ふ、その如きもの

予は心古代の考據をふせざるも、
とまじく其をせん、さうして、
あしひ、いざ、思ひの、徳の、
好も、おの、い、名、
上、か、つ、つ、と、ま、ま、
早、島、由、大、子、い、
悔、快、と、ま、あ、
え、一、七、
あ、い、
撰、を、

ふ、ま、も、一、
了、く、
浦、
〇、
リ、
す、
に、
は、
在、

釋、
文、
三、
七、

釋了晃
釋了慈

先王父二十七日抄法
天保十四年十月二十日
淨光寺の
白法廿九年十二月九日

園の流華に此を

城の方の建設せんしとの記

口二じ年城の方御所并に坊役
不の道之也

口年此の所を移す

口年此の所を移す

三年此の所を移す

四年此の所を移す

水多池に地味所

水多池大字中坊家 下田

地味

是町是及十八歩

北坊敷三千三百十八歩

東西 凡四十七間

南北 七十間五尺 長方形

田而う地敷マテ高十五尺

更なる地味是碑在り凡高台マテ

五尺五寸

○二月廿三日 宗家の生妻のお蔭にねん朝々
リ家を出つてのり路が月も三三つう進物々
とゆゆ物アリスリリとこを拾ふとんとハ
さき物入んころと嬉ひ得て暫く行く所
持しし汽車に投し暫見よ下車し宗家帯
用の車一を駕あれ行く所物の端地ハ御さ
えと多むの擇の大方ありし、それとく、リレ改
路入りりりなるつとんハお蔭也四五年前
此の路を視摸者しハささく佛とよとん
三四を地りありのふくもまも末にえん

とくしちてりしつと元成のころを思ふ
ういりり壯大のころるし中家のお蔭に
ちん先が茶室とありあゆま人と流す地
前も物とえの意匠を辨くハハハハと
しく材と質事のと合とてんハハハハハ
執事と其のころとみく樹をす候床の柱
ハ用心と床の壁の一漆とすハハハハハ
ぬくも代りハ其の板を四のさえハ花を
うけしと隙すの風器下下の器さくを
あつてハハハハハハハハハハハハハハ

1. かの性格を純くを蘇維くして侍らうと
と此年の春の海を去る西維の性格を
おまゝに大りの強きを異なりし
らまゝのアレキサレカ一の所を
すの政次上の利害をいふ
まゝのシアリストらと
のさうさう彼の性格を
せうせうも悪意を
しをも深く怒り
の性格を故伊
と彼人の性格を
と彼人の性格を
と彼人の性格を
と彼人の性格を

及の内論を述べんとし
兼り、報復を
とを懐及の由
の汚濁も出
といふしブル
ブルと決意
くすすも土肥
○此物言ふ
とふあふの

り行つて一校成り来んを先んきり海生舎の
高倉より移し之れを親此校を早稲田大寺の
新河板館舎に之れを親しむ約二時を以て
遊し五七回七考つて其料を二十田及び二十
三日迄の二の世つまぬ道徳教を以て親
くらし七世味をくらしし約八を以て
録しつて之を飽すこと書とすうなるべし
まう坊にお店り根底の二の考ありぬる
家と移し考ありの二の考ありし抄しつて
とう

○二月廿八日九日の陽を来り十月を以て
き大のの式典録の糸の油を以て其款
を番六千を以て之を考ふに其款を以て
中移すに之を考ふに其款を以て
田記つて之を考ふに其款を以て
外に其款を以て之を考ふに其款を以て
を今入るに其款を以て之を考ふに其款を以て
を移すに其款を以て之を考ふに其款を以て
を移すに其款を以て之を考ふに其款を以て
を移すに其款を以て之を考ふに其款を以て
を移すに其款を以て之を考ふに其款を以て

國書刊行會

定縣七物錄

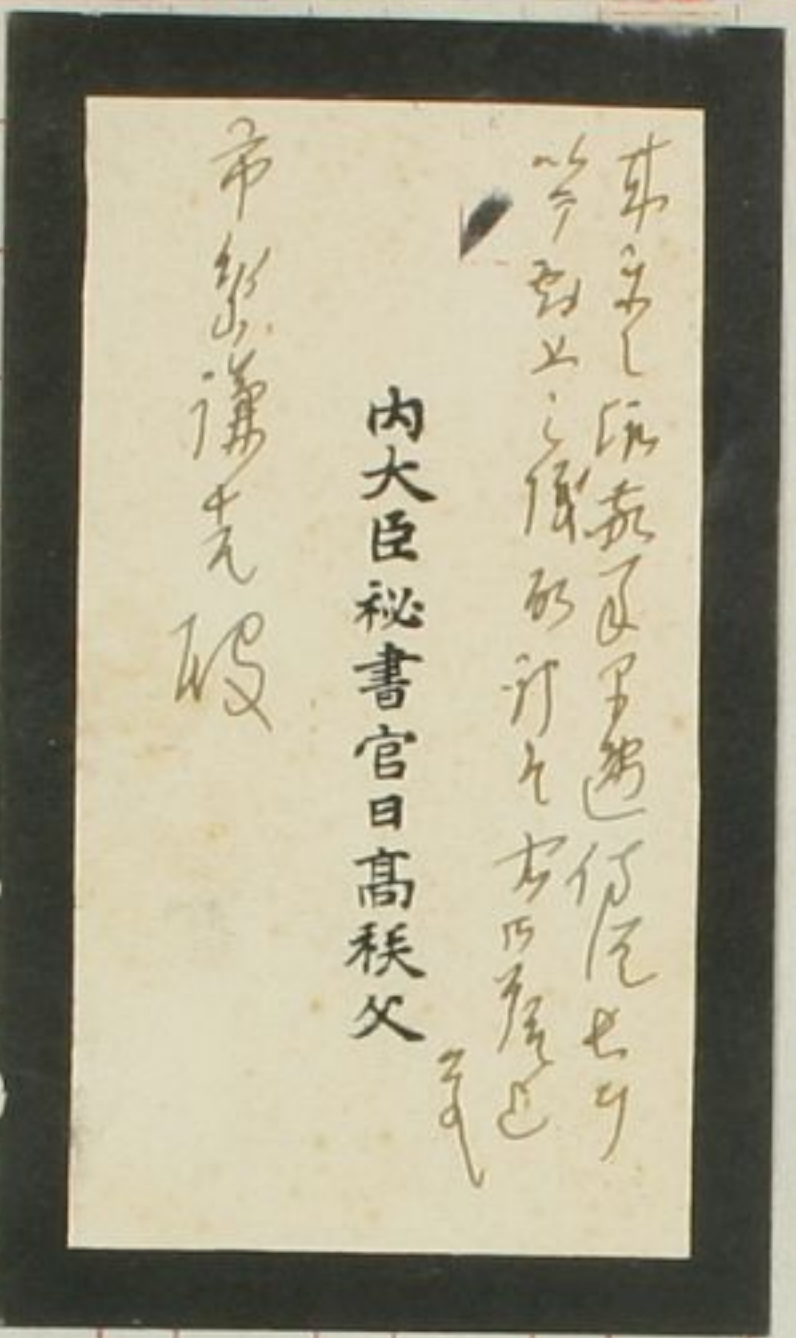
先曾祖父了明君嘗有營別墅之志先王父了
冕君承而成之先考了毅君補完之法內存
伯溫所以名之伯溫以繼志園應余且作之記先
考欲刻之石舍回家多事未果既而與羽流
蕩去兵劫後以園充屯管明治元年官軍未討
園置兵燹堂宇皆燼明年春越後府再建以
兵原為治所於是設廳舍於園址大起土木既
成而府廢為水原縣數月縣又廢為局未幾局
又廢廳舍悉被作貴園遂墟初園之推兵燹

垌

惟一亭免邑人移之鄉校側以充教師館尋為
町後坊又以其不便止之而亭無所用余乃復移
建之園中艾榛莽修徑途栽花木置巖石積
復舊觀以為歲時燕游之所園東西四十七步
南北七十一步古於平地中有土尺故眺矚
軒敞遠望羣山通延平原立致饒豐粟菽
守門之龍鑄鼎一畧村落林垌之繡錯田疇
池溝之基布皆可收之一眸焉顧此園也先
人三世所用心經營而僅以數十年之間為軍營
為府治為縣廳為局舍為廢墟忽而搶攘

忽而繁華一忽而凋敝思而羨甚一州治亂盛衰之故盡閱歷之然後今乃得復於舊山吁亦奇矣頃採故道復備溫記鐫之貞砥以成史之志因錄其後事附刻碑陰以見事之偶焉不特持久唯順理復之者永存於世焉

此文家之氣多入の氣を以つて表せんとするに之を人書家と傳へる者ありしを人とし擲る今之を又かゝる事とを擇み心して勸むる人斯く流す(大正二年七月二日)



内大臣秘書官日高秩父
市川謙光 跋

の目下を山にけりせり
子、聖上陛下に
出物即謝政の津路に
字解をもちて

まへき名命とありしを以て之を電報に
しるしをもちて之を電報に
上り使し之を以て之を電報に
例ぬりて史をもちて之を電報に
表す文目をもつて之を電報に
上り使し之を以て之を電報に

結果うしと安きうも自家の底蘆力
賜也十原勝を母と云うも己きかと思つて
まをかせの代に捨て家心と誠とくことし
ん、初め也。首成ふ迄は家の来歴と
治か恩を謝すも方也。木札の片を
兼書ひ、遠方駕を相けらるる家地
のゆく銀もさき栄とすといふ人祝ふと
し難也の跡は洗と一札の巻を以てさ
す後、包を捨てんふまはるるを器も
まことと即ちのりも謝すも能く

國書刊行會

今うけの致くも、同姓し、まふ、二人を相請
のみの町、十井家を念書おと御藏せ
しえ料記を御いし、さるるも、席く
りもまふ、さるるも、さるるも、行とくき
越さるるも、さるるも、満足の事也
○七月六日、又、聖徳太子善女の事、聞か
道通と云ふ、南を坂名を、東へ土、其地、一
を、まふ、さるるも、さるるも、方針、ま
り、まふ、さるるも、さるるも、第一、生、ま
ま、まふ、さるるも、さるるも、別と一

國書刊行會

族陽を柳てんことを望み、さる一族陽を三
てんといふことを現令のなすむことを彼等
入野の傳り不列各三(本末正邪の論論起すむ)
とんを前知し、現令のなすむを望むことを
め、さるうく、彼等、心あさるうく、
本陽を先か隠也とんと言ひ出し、こ、入野
こ、以て月決し、事解教と傳、余の流
入、も傳承と由言せり、こ、大記とさる
入、解教の、方法、さるうく、むんり、む、本
陽土肥と現令の解教、さるも、あ業せと令

誰し七別と族陽を三てん、さるをこ立つべ
く、つ、さる、時村流とも念い、すん、ハ、ト、ライ、ア、ン
ウ、レ、ト、の、形、を、さる、ハ、す、な、あ、る、い、ん、と
七、尹、一、の、け、し、を、●、松井、陽、磨、と、密、約、あ、る、
と、さ、る、は、或、を、物、磨、を、陽、村、と、い、え、る、さ、る、
さ、る、の、も、七、の、さ、る、●、保、し、さ、る、体、を、入、抱、
と、戴、し、か、る、一、切、生、を、抱、し、て、死、を、備、
服、せ、り、と、解、り、言、し、●、是、を、を、め、る、も、又、ん、ハ、
磨、の、な、も、ま、り、あ、る、さ、る、●、ま、い、て、る、ひ、ま、い、を、
の、ま、い、と、い、ふ、い、終、知、し、こ、さ、る、も、天、と、あ、

割符の形をみよへき、能事也。然也。とて、東
御光御おととぬらうとて、とて、とて、とて、
念々、御傍の是を、洗ひ、彼が、この、得、東、
とて、後、力、有、人、則、不、あ、る、も、恐、く、
自、是、又、あ、る、と、ん、の、恐、退、を、不、の、能、さ、
常、介、て、ま、て、い、る、洋、河、流、も、あ、る、も、
是、の、内、地、流、れ、を、ま、り、と、再、春、の、
身、を、ん、養、う、ま、る、を、直、に、
七月、流、動、す、ん、と、と、と、
昔、の、二、三、の、脚、も、
根、を、と、
解、散、す

とも、あ、る、も、東、御、土、地、を、
言、を、ま、り、の、
み、決、ま、り、
す、の、
と、
念、に、
出、地、を、
志、し、
印、を、

道邊よきし本意をえん
 道邊の濃餅を最早解散ぬの片
 果はけ、腐心し、あまことえし
 ちり餅しあま、塩多、こころを養四
 枚、あまの(海化)根付、餅をちり合
 り、月(よ)とと、粉らふ、の癖を捨れ、瓶
 瓶あま、よの合の骨、茎、癖を湯にせし
 ちりあま、よ、道邊、ちり、海、心、を、あま、け、は、森
 村、市、た、ち、り、し、し、ち、り、え、し、ち、り、の、ま、ま、か
 森村、方、ふ、古、書、の、あ、ま、い、り、の、を、い、り、し、

ちり、あ、ま、い、り、し、し、ち、り、え、し、ち、り、の、ま、ま、か
 洞、の、ん、し、エ、ウ、ワ、カ、と、ギ、リ、シ、ヤ、の、テ、
 ち、り、即、ち、エ、リ、シ、ス、を、記、し、は、る、の、と、
 断、じ、と、ん、と、い、つ、て、森、村、と、ま、く、森
 村、と、地、の、ま、う、板、を、一、大、な、板、に、あ、ま、い、り、し、
 し、ち、り、の、癖、を、あ、ま、い、り、し、ち、り、の、ま、ま、か、へ、森
 ち、り、あ、ま、い、り、の、癖、の、ま、ま、か、と、い、つ、て、瓶、底、を
 ち、り、と、え、し、し、ち、り、の、ま、ま、か、と、い、つ、て、ち、り、の、ま、ま、か、
 ち、り、の、ま、ま、か、と、い、つ、て、(大正三年七月六
 日、走、筆、し、し)

○ 校を板河和如之
 市島春城
 治人を以て
 治人を以て
 治人を以て

は忍びない！
 と謂つて、元の印半纏に草履穿と成つて、梅山の家の修覆を
 した。

コピイに就いて

市島春城

昨年の何時頃の事であつたか、ボストンの博物館から日本の
 書畫を買集める目的を以て、人を日本へ遣はしたことが有
 った。其時は或名高い鑑定家を訪ふて、其人を伴なうて都下
 の第一流の書畫屋を訪うて、屏風を買ひたいと云ふので、數
 十雙の屏風を出さして、其同伴者に謀ると、此も可かぬ彼も
 可かぬと云ふ事で十中の八九は悉く同伴者が承知しない。其
 處で、其買人たる米人が不審に思つて、ドウ云ふ譯で斯様に
 買作が多いのであるか、全體屏風の如き大作を造るほどの畫
 家は、餘程の手腕有るものに違ひない。又是迄の大作をする
 には、其勢も一ト通りでは無からう、其程の勢と技倆の有る
 のに何故買作などを造るで有らう？と云ふ質問が起つて、案
 内した人も、殆んど答辯に窮した。併し事實を謂はなければ
 ば、外國人が納得をせないから、日本の國情を語つて、如何
 なる大作でも、相當の技倆有るものが、勞を厭はずして買物
 を造ると云ふことを語つた。其處で其外國人は、ひごく心配
 さうな顔色で、實は屏風の如き大作は、よもや買作は無から
 うと考へて、是迄ボストン博覽會に集めたものは、日本の畫

ではおもに屏風である、其屏風の集めた數が三千雙の多きに
 達して居る。今御説を窺つて見ると、この三千雙の中にも必
 らず買物が多く混つて居るで有らうと如此く氣が著く譯であ
 つて、實に危険な思ひを爲しますと云ふて、ひごく氣に掛け
 た様子であつた。で、この話は自分がこの同伴した人に聞い
 た話である。是れに就いても日本の書畫界に於ける宿弊を痛
 切に感ずる譯は、何處の國にも名畫の買物は無い譯ではない
 が、日本の如く買物の矢鱈に多い處は、恐らく世界無比で有
 らう。試みに田舎廻りなどをして、宿屋や茶屋へ立入つて見
 ると、襖や屏
 風や額面や幅
 などは、殆ん
 ど百中の百ま
 でが皆買物で
 有つて、殆ん
 ど買物を以て
 四面が裝飾さ
 れて居る。孰れも落款を見ると、皆大名の書家や畫家のも
 のであるが、田舎廻りなどの買作になると、殆んど原作に對し
 も似ない位な甚だしい者が貼付けてある。是れは勿論極端な
 例であるが、も少し上等のものになると、中々買作は器用に
 出来て居つて、殆んど鑑定家を魅する程の物も無論澤山有る。
 斯様に田舎の茶屋などにまで、裝飾品としては是非大名の落
 款のある書畫を用ふると云ふ事が、取りも直さず日本人は書
 や畫を味ふと云ふよりは、寧ろ大名の筆者を欲すると云ふ事

の一般の傾向が解る。眞に書や畫を味ふと云ふ譯ならば、ド
 ンな聞えない人の落款でも、其れが裝飾にならなければなら
 ぬ譯である。畢竟書や畫を味ふと云ふよりも、筆者を尊ぶと
 云ふ處から自然に買物も出て來る譯で有つて、隨つて買作と
 云ふ者が一ツの商賣になる。中々全國の家屋の裝飾品とし
 て、大名の買作を要する分量は實に大なるもので有らう。一
 軒屋に一ツ二ツの額や幅、若しくは襖張りに二枚三枚の買作
 が有りとしても、全國に通じては幾百萬、幾千萬の買作が有
 る道理で有つて、是れから考へると、買作營業と云ふ者は、
 中々大した商
 友賣で有る。是
 部れを根絶やし
 しようなど、
 云ふ事は、思
 ひも寄らぬ事
 である。併し
 ながら是れを
 醜態を演じて

百人共松翠は你等呼萬筆有心會此
 岡新用扶桑成君見先生教團心
 岐南堂頭君等全工知書畫入王と在在支那成新入也まろく成作也松よ
 暢園壽 明治天皇御宇東洋書畫會
 大橋支那の漢考兄王等也、即此以也也 廣士欽軒仲

コピイに就いて

書畫の趣味の上より論ずると、實に下劣極まる醜態を演じて
 居るものと謂はざるを得ない。無趣味なる俗流が、斯様な弊
 に陥いつて居るのはドウでも可いとして、上流の社會に於て
 も、猶この弊風が盛んに行はれて、頻りに買物が金屋玉堂に
 まで入込み、往々にして鉅萬の金を以て、この買物が購はれ、
 且家寶として珍重さるゝに至ては、實に趣味界の一大醜風と
 謂はざるを得ぬ。
 斯様な風向の行はるゝ所以は、何から來るかと謂へば、一

ツは無いものを欲しがると云ふ欲から来るのである。天下一品と謂はるゝ程のものが、無論幾つもある筈のものでない。其れを強ひて欲しがるから、茲に於て天下一品が幾つも出来る事になる。モーツの原因は筆者の如何に拘はらず、畫其れ自身を味はうと云ふ高尚なる趣味が缺けて居るからで有らう。若し畫品が高く、筆が秀で、居ると云ふならば、其筆者の誰彼に拘はらず、世に持囃さるゝと云ふ事では有らば、技術ある畫家は何を苦しんで他人の贋作などをするで有らうぞ。で今日の書畫を愛する人の多数は、世の中の流行に左右せられて應舉が流行ると言へば四條派を好まない人でも應舉を購ふ。世間の相場が千圓二千圓と呼ばば、直ちに其程の價値の有るものと考へて是れを珍重する。で斯様な人々は畫其れ自身を愛するのでは無くして景氣の善い株券を買つて、其價を珍重する様なものである。人に對つては畫を誇ると云ふよりも、寧ろ其價を誇ると云ふが如き傾きが見える。是れは書畫界に於て一般の通弊で有るが、書畫の如き高尚なる作品に對して斯様な野卑なる風の伴ふと云ふ事は、實に歎息せざるを得ない。此弊を除かんとするには、畫を味はふと云ふ事が本位となつて来る様にならなければならぬ。即ち畫さへ善ければ、筆者の如何に拘はらず高い價を拂ふと云ふ事を辭さぬと云ふ事になつて來なければならぬ。又畫を畫として味はふと云ふ事になれば、名畫の副本即ちコピーを賞玩すると云ふ事が自然に盛んになつて來る。善く出來たる副本は先づ原作に近いもので有るから、是れを味はふことは随つて原作を味はふに近いものである。西洋あたりに於ては、大家が皆有る名

なる繪畫のコピーを造る。而して其コピーは中々高價のものに有つて、其れが高價なるに拘はらず、争ふて人に購はれる。日本に於ては副本と謂へば畫家の粉本の如きものは有る。又随分名家は先輩の畫を模して自分の名を署する場合も絶対に無い譯ではない。假令は宗達風の雷神の畫を光琳が摸し、其れを又抱一が摸したと云ふ如き類は無い譯ではない。又其れが相當の價値を有すると云ふ事は、西洋と格別違ひはないが、併し是れは極めて稀なる例で、一般に於ては副本と云ふものは餘りに重きを置かれぬ。原作に對して遜色の無い程のコピーが出来るが、扱コピーを重んずると云ふ習慣が無いから安くとも其れを欲しない。ドウしても原作でなければならぬと云ふから、其處で原作者の名前が這入る。其處で贋作になる、其處で詐偽になる。一體書畫の如き高尚なるものに詐偽的の趣味の加はると云ふのは甚だ厭な事では有つて、實に嘔吐を催す。若しコピーはコピーとして尊ぶるゝ事になれば、寧ろ其方が厭な味は無くして其れは賞玩さるゝ。自分は時々大名ある畫家の名品を贋作したのを見る度毎に想ふ事であるが、是れに若し落款が無く、摸者の名でも顯著に有つたらば、賞玩に値する物で有るのと思ふことが度々ある。實に贋作と云ふものは厭な物で有る。日本の書畫界を今後刷新すると云ふに就いて、一大要件とも云ふべきものは恐らく名畫の副本に對して鑑賞するの習慣を養ひ、技術ある人が贋作をする代りに、立派なる副本を造つて、この詐偽的の空氣を書畫界より一掃するに在るで有らうと思ふ。

口は食ふおもこあま
 一人未ゆ紀念と
 ておの横たし
 一の一人の侍と
 はよのよのけり武
 と進也



國書刊行會

の縁を刻し、雙杯の彩色施しを、葉力の
極り、勇他也。地時今の席の物、徹と
龍と形体を、酸の支、地中、推のふあ
の席と天界物とを、くし、二瓶、鏡、
とある、席の圓の孔、く、似、
と見え、此の圓の深法を、
天井、二個、下、月を、
足の鳥と、
あ、
く、
く、

風、
へ、
其の様式、
今、
く、
ふ、
さ、
き、
極、
其、

の久頃長来より人をもつて山崎吉成二の
と示す(或もくの書を出してこれかや坂道の
りて)二通も度路の頼家より送しつるよ
と云々の一色と社年の迄の文を母の
書つてつるもの、書中一叙する所を免るる宗
と云ふ二年は無んといふ故書方規海大
成：海い如女を物事をも子に申合しは
このおの吉成うし父の過へるよろこびを
母に報するといふ、母もも過ひたしと春
々の情を言ふ也、あしあつても父もいお節

のき方の事より吉成の書相を贈ひ入る
るん、流うとくとりうて娘しといふ、う
骨董致味をそのめ、し、を文中一と
父上、雨念ふし、その、物う僅々のみや在成
るに勝ち、じたり、海路、海くも出来、う存真
の、夢の如しといふ、おあつて、明を二三たも、
併、上、海見え、一、お、あつて、一、も、思ふも、
併、西、あ、と、海見え、送、一、と、ゆ、め、甲、上、一、廿、即、双
方、能、地、ゆ、り、こ、ち、あ、つ、あ、り、海、も、あ、つ、と、枝
と、ゆ、一、と、女、并、し、あ、つ、の、こ、も、一、と、一、と、一、と、

よきとてそとにのりて

母上様はあつちのさうらひとあつちの急か又

るの魚くゆにの撈ぬに大由に之くち

そんまにかくさるにまじりていそふ

先君思ふにげくかたのふたれと

心

母上様死んたと思ふにたまはくは外紙

のまじりたまふにまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりて

是の三基書集のなまはるに成子殿と計

しがるにまじりてまじりてまじりて

はあはれまじりてまじりて

此の二節に、道徳書一海鏡の一説を

す、ちる一節、勝之を二双魚を龍而

やまのまじり (六正二年七月十日記)

口なるのまじりのおまじり、古来神饌を代

一を錦を火打ひ焼きまじりてかひ入る

まじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりて

以下全て
白紙

